

詩とことば

阿部 公彦

詩は昔から舞台との相性がよかった。古代のギリシャ劇やシェイクスピア作品の威力は、韻文の効果抜きには語れない。オペラやミュージカルにしても、原点にあるのは言葉のリズム。

二〇一一年の初演以来ヒットを続ける宮城聰演出の『真夏の夜の夢』(SPAC 二月二五日〜三月二〇日)は、その原点を強烈に想起させる、詩劇とも呼びたくなる作品だ。反復性の強い打楽器の演奏を取り入れることで言語以前の無意識をうまく引き出し、独特な「祝祭音楽劇」を作る。俳優たちは演技と演奏の両方をこなしつつ、身体の底から響くリズムに自身の台詞を乗せていく。狙いは「詩の復権」だという。英語原典の韻律を日本語で生かす試みとしても面白い。

言葉の身体性を前面に出す、力強い詩集が出た。高良留美子『その声はいまも』(思潮社)。収録作品の幅は広く、呪術的な律動に乗った高らかな朗詠もあれば、アイロニーの利いた寓話もある。死者に

向けた哀歌もある。しかし、一貫するのは無言にも似た、言葉以前の境地に詩が踏みこむこと。そこは死者の国でもあるだろう。表題作は大震災直後の作品で、語り手は津波である。「わたしはあの女の声を聞いている／その声のなかから／いのちが甦るのを感じている／わたしはあの女の身体を呑みこんでしまったが／いまもその声は／わたしの底に響いている」。

「言語以前」の世界への憧れ

五日に大岡信が亡くなった。骨太な詩の書き手としてだけでなく、連詩制作を通して個の枠を超えたポエジーを引き出し、批評家としては詩の文化的価値を明晰に語った。優れた作品を見つける達人でもあった。そんな希有な才能に対し、早くからの盟友谷川俊太郎が一日の「朝日新聞」に寄せた追悼詩は、まるで大岡とともに言葉を超えたものへの憧れを漲らせるかのようである。この上なく美しい。

「本当はヒトの言葉で君を送りたくない／砂浜に寄せては返す波音で／風にそよぐ木々の葉音で／君を送りたい」(「大岡信を送る 二〇一七年卯月」)

不可能を可能にする、魔法のような語りかけではないだろうか。(東大准教授)